

今週のメニュー

[トピックス](#)

PVC News No. 77を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

[随想](#)

オックスフォード便り（番外編：震災ボランティアに参加しました）

関東学院大学 織 朱實

[編集後記](#)

トピックス

PVC News No. 77を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

6月15日に塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）は[PVC News No.77](#)を発行しました。今号はトップニュースに「塩ビサイディング塩害防止効果研究」として日本建築学会九州大会にて成果報告として発表した内容を紹介します。

視点・有識者に聞くのコーナーでは明治大学の北野大先生に化学物質を管理する「化審法」について語っていただきました。

No. 77の構成は以下の通りです。

トップニュース

塩害から家屋を守る塩ビサイディング

1年間の暴露試験で高い遮塩性能を確認。

視点・有識者に聞く

ドクター・北野の特別セミナー「化審法入門」

明治大学理工学部教授 北野 大 氏

リサイクルの現場から

(株)トッパン・コスモの塩ビ壁紙リサイクル事業

アールインバーサテックの技術を導入、工場端材をマテリアルリサイクル

インフォメーション

1. 福井市役所が庁舎1階に塩ビサッシ内窓を施工

断熱改修で省エネ対策を強化。市民の環境意識向上にもアピール

2. 「ことばのちからで街おこし」松山市の取り組みに塩ビもひと役

耐久性、印刷性など「素材の力」を生かして、モニュメントや垂れ幕の材料に

塩ビ最前線

ナショナルマリンプラスチックの「防火水槽保護膜」

塩ビターポリンは水槽膜の防水性・耐震性に最適

広報だより

「塩ビものづくりコンテスト2011」の経過報告

「建築・建材展2011」に出展（塩ビ工業・環境協会）

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

「視点・有識者に聞く」のコーナーでは『ドクター・北野の特別セミナー「化審法入門」』として明治大学理工学部教授北野大氏にインタビューしました。

北野先生は様々な資料を交えて、化審法の制定の背景や改正の経緯についてわかりやすく説明して下さいました。また、POPs条約専門委員会のご経験を通して、化審法とPOPs条約の関係などについてもお話しいただきました。

「リサイクルの現場から」は(株)トッパン・コスモの塩ビ壁紙リサイクル事業のご紹介です。アールインバーサテック社の技術を導入し、塩ビ壁紙の工場端材を塩ビと紙に分離してそれぞれを再資源化しています。幸手工場では工場端材の97%を細片化しリサイクルしています。残りの3%もほかの手法でリサイクルしておりゼロエミッションを達成しています。

「インフォメーション」では、本庁舎1階の市民ホールに塩ビ製の内窓が設置された福井市役所取材しました。窓の近くで執務をしている職員の方からの「寒い」というクレームが激減したとの話を聞き、内窓をつけたことによる効果を実際に体感できたようでした。

「塩ビ最前線」では『防火水槽保護膜』を紹介しています。これは防災製品のひとつで、塩ビターポリンのシートを防災水槽の内側に施工して、水槽の防水性・耐震性をアップできるものです。塩ビの防水性、耐久性に優れた特徴を生かした製品です。防災に対し見直しが求められている今、注目が集まっています。

是非ご覧下さい。

『PVCニュース』は[JPECのホームページ](#)から、最新号、バックナンバー共にご覧頂けます。

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

随想

オックスフォード便り（番外編：震災ボランティアに参加しました）

関東学院大学 織 朱實

前回のオックスフォード便りからあっという間のひと月です。今回は、「オックスフォード便り番外編フランスその2」として、フランスの蚤の市の様子をお知らせしようと思っておりましたが、震災3カ月目のちょうど6月11日に学生を連れて岩手県・大槌町に3泊4日の災害ボランティアに行ってきたので、その様子を少しお知らせしたいと思います。

震災直後は、何をしてもいいかわからず、また今被災地入りしても却って地元の方にご迷惑をかけてしまうのでは、ということで落ち着くまで様子を見て、その間学生たちと宿泊所、交通手段等いろいろ検討してきました。結果、車での移動のリスク、宿泊所の確保という問題を考えて、自分たちで全て手配するのではなく、旅行会社主催のボランティアツアーに参加することにしました。



これが、大正解！ツアーメンバーは、老若男女（下は学生の19歳、上はなんと69歳の男性、福岡から参加のツワモノも！）あわせて44名（うち私のゼミは17名）。様々な年代の方たちと3泊4日みっちり一緒できたことは、学生にとっても私にとってもとても良い体験になりました。

ツアー自体は、金曜夜22時に東京池袋をバスで出発、朝6時に現地到着。10:00-15:00までボランティア活動、2時間かけて花巻温泉に移動して1泊、翌朝7時出発、10:00-15:00ボランティア活動、途中立ち寄り温泉で汗を流して、東京に向かい、朝4時に池袋着。と、なかなかハード。バスは普通の観光バスで寝台用でないのも、そこで2泊が一番厳しかったかもしれません。福島、宮城、岩手とコンビニなどで食料を補充しながらの移動。

主要道路沿線上は、一見したところは、普通の町に見えるのですが、海に近づくと様相は一変。トンネルを抜けて釜石に入ったとたんの惨状に、寝ていた学生も起き上がり、言葉もなく窓の風景を茫然と見つめる、という状態でした。



津波襲来時で止まっている時計

私たちが割り当てられたボランティア活動は、20人一チームで、個人宅の土砂除去作業を行うというもの。瓦礫や目につくごみを取り除き、スコップで土砂を土嚢につめ、集積場まで運び出す、と書くと、とても簡単そうなのですが、これが想像以上にはかどらず驚きました。もっとも、PC以上に重いものを、近年持ったことがない私も、周りの雰囲気におされて、意外と頑張れることのほうが自分的にはびっくりでしたが（「年寄りの冷や水」ってということでしょうか？）。でも、後から無理した影響が出そうで怖いです。

目の前に土砂があると、「(ある程度は)綺麗にしたい」と体力を考えずに、ついつい頑張ってしまうんでしょうね(また、人間の体はその場では動けるんだ。これが～)。とはいえ、20人が丸2日かけても1軒のお宅の周辺の土砂を取り除くこともできず。被災された家屋の数を見ると、ボランティアの人海戦術の限界を感じたのも事実。臭いもかなりひどく、また廃棄物集積場からの自然発火のおそれもありそうな雰囲気、一刻も早く国家的に土砂除去作業にかからないと！現地で実際に土嚢を積んでみての実感です。



ネコ(一輪車)を扱う姿も2日たつと板に付いてきます

被災者の方からも、3 か月経過したこともあり、学生たちはいろいろお話を伺うことができました。「自動車で押し流されてオート式の窓の開閉の電気系統が水でだめになったけど、流木が窓ガラスを割ってくれて、浮き上がったところにちょうど木があった」、「自分の車はアニメのルパン三世みたいな波乗りをして助かった」、「子供の遺体だけが、軽いせいにかみつからない」、「後ろから津波が迫ってきて、手を引いていたおばあちゃんの姿が後ろを振り向いたらいなくなっていた」など、現場での生死の分かれ目の生々しいお話に、学生たちもお年寄がどうしても逃げ切れない状況や、津波警報が届いてもなかなか動けない状況など、報道では知っていたことが、あらためて現実的課題として迫ってきたようです。

畑の土砂除去作業は、20人がまる2日かけてもまだ除去できない状況。石灰をまいても畑が機能するのに3年かかるそうです。そんな悲惨な場所でも花が咲いていて、それも印象的でした（岩手はちょうどブルーサルビア、ディジー、花水木が盛りでした。震災がなければ花を愛でる人でにぎわったのでしょね）

ボランティアに行って、なにができたのか？自己満足ではないか？という声もあります。でも、学生から「先生、今回連れてきてもらって本当によかったです」との声もあり、実際に作業をしてより被災地が身近になったこと、学生が見てきたこと感じたことを親や友人に伝えることで、みんなが被災地に関心を持ち続ける、ということがなによりの成果なのではと思っています。

個人的には、音を上げるかと思っていた学生が、陰ひなたなく働き、またそれぞれの意外な一面を発見できたこと（土嚢を積むのが上手い子とか、さっと目配りをしてごみをかたすこととか、体力がない子もそれなりに自分の仕事を見つけてやっている様子）が大きな収穫でしたね。

大変な作業ばかりでなく、花巻温泉では、普段は使えないような特別な別館をボランティア用にまるまる解放していただいたり、夜は（翌朝が早いのであまり遅くまでは×でしたが）他のボランティアの方たちとお酒を飲み交わしたり、ボランティアセンターの方たちにお茶やお菓子を頂いたり、被災地の方とお話ができたりいろいろな交流や経験もできた3泊4日でした。

さて、これから私たちに何ができるか？今回の経験を踏まえながら、息の長い活動をみんな考えていきたいと思っています。



瓦礫の中でも
リンドウが咲いています



編集後記

大震災から早3ヶ月が経ちました。被災地の復旧や原発事故の収束などの進捗は予定通りになっていないようです。政治が早急に決断し進める必要のある事が多いにも拘わらず、今の政界の動きは別世界のように思えます。先週には電力削減の要請が関西にも波及し、来年は更に厳しくなりそうとの報道も見られます。節電はおおいに進めるべきとは思いますが、このままでは国内の産業がどうなるのか心配です。早急に将来のエネルギー供給方針を定め不安をなくしていただきたいものです。(可)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
